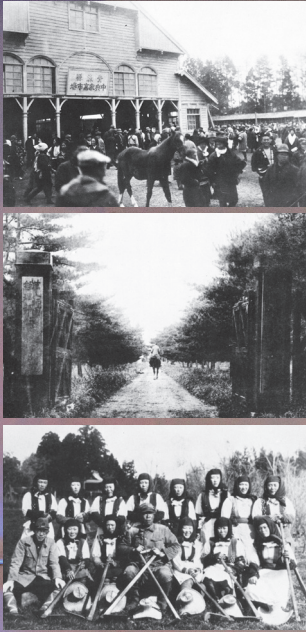


開拓魂

KAITAKU-SPIRITS



No.01



挿入写真:
上▶最盛期のせり市場前の雑踏ぶり
中▶初期の軍馬補充部三本木支部分門
下▶軍馬補充部で働く軍馬人(くんぼと)たち
『写真集・明治・大正・昭和 十和田』
(工藤祐典、昭和55年国書刊行会刊)より



青森県南部十和田のステージで、
津軽出身ロックカーが吼える意味。

お父さんが見た海

小泊の海を見に行った方がいい
僕の友達だったら
僕が昔遊んでいたんだ
と

いう理由だけでもいいから。
そういうささいな事からでも
友情は広がっていきけるものだ。
そういう小さな出来事からでも
ある人間が
ある人間を
信ずる事ができるものだ。

小泊の海を見に行った方がいい
その海は北だが
行くだけで北がわかるはずだ
行くだけで
いや
通りすぎるだけでも
北
がわかるから。

北がわかれば
人間がわかる。
人間がわかれば
きっと海もわかるだろう。

作 三上寛 処女詩集「お父さんが見た海」(思潮社)より

特集：青森県十和田市

世界一小さなロックフェスティバル

開拓魂02 吼える。絶望のどん底に負けない技術

津軽が生んだジャパニーズ
フォークロックの先駆者 **三上 寛**

青森県十和田市の開拓魂を語る

青森の侍魂に魅せられた料理人

現代青森料理
新橋ボワヴェール・シェフ **川口カズノリ**

発行●東京十和田もみじの会
発行所●B.L.C.

http://kaitaku-spirits.com/



特集 青森県十和田市

世界一小さなロックフェスティバル「開拓魂02 吼える」

三上寛が語る 十和田の開拓魂

青森県十和田市。観光スポット十和田湖の東側玄関口であり、日本有数の景観を誇る奥入瀬渓流を有す。2010年12月4日東北新幹線延長に伴い開業する七戸十和田駅より車で約30分。東北自動車道八戸ICより約40分。JR三沢駅より十和田観光電鉄で約25分。
十和田市ホームページ <http://www.net.pref.aomori.jp/~towada/>



世界一小さなロックフェスティバル「開拓魂02 吼える。」は、メインの三上寛を筆頭に、東京首都圏で活動する様々な地域出身のミュージシャン6人が各自ソロのスタイルで出演した。メンバーは上段左からチバ大三(独唱パンク、岩手盛岡)、杉浦コオイチ(甲冑、東京世田谷)、川上テルヒサ(福井)。下段左から、加藤“SINGER A”敦子(山形上山)、中央・敬々(青森八戸)、右・坂田俊英(企画、青森十和田)。

開場は十和田市の中心街、旧国道四号線と産馬通りの交差点の特設屋外ステージだ。産馬通りの名のとおり、かつて馬の市で栄えた場所である。

十和田市は、五〇〇年前、荒涼たる原野に人工河川を引くことで開墾された。後に「馬の町」として名を馳せ、明治二〇年代から戦前までは日本最大級の軍馬補充部があり、多くの人と馬が往来する南部を代表する商業地だった。

だが今、その記憶を宿すものはない。街は他地域の多分に漏れず、この数年でシヤッター街と化している。

一方で、二〇〇九年に十和田市現代美術館がオープンしたのをはじめ、地方都市としての数多くの試行が果敢になされ、新たな変化の時代を迎えている。

しかして何故に津軽の三上寛が南部でロックフェスなんて？ そんな疑問の声も当初はチラホラ。なるほど青森県には南部と津軽の争いの史実が確かにある。が、最早敵はお隣りではない。国際化、情報化という外敵である。凄まじいのが青森県の開拓都市十和田市だからこそ、歴史の中に未来を扉をこじ開ける鍵があるのではないのか。



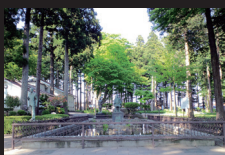
二〇〇九、二〇一〇年、二年分の三上寛の十和田開拓魂ライブの語りから、その鍵を探してみる。

五月四日の縁でつながる、稲生川と、母と、寺山

太素塚にお参りに行って新渡戸記念館で、大変参考になる話を聞きました。開拓の魂の元祖である新渡戸翁。約二五〇年前ですかね。稲生川ができたのが五月四日ということ、奇しくも私の師匠である寺山修司の命日でもあります。五月四日をキーワードとするとびっくりするのが、うちの母親も五月四日が命日だったらしい。五月四日というのが、ここで何か不思議な縁を感じました。(新渡戸家の)八代目の方にお話を聞きまして、先祖は千葉っていう姓だったらしいですね。

あの方たちがいなければ新渡戸稲造もいないわけで、アメリカという国も我々は知らなかったわけですね。そして「武士道」という本を書かなければ、外国の人たちには「BUSHIDO」という意味すらも分からなかった。

あの頃の森鴎外とか新渡戸稲造、あの方たちはやっぱり、たつた二人で日本人の誇りみたいなものを背負って外国に出てゆくわけですよね。それは我々が失ってしまった精神だったんじゃないでしょうか。昔の人たちは私たちがより遥かに大胆で自信に満ちていたのではないかと、思います。



十和田市の中心の東側に位置する太素塚。太素とは開祖新渡戸傳の号で、塚はその墓である。傳と、その嫡子の十次郎、孫にあたる稲造が銅像と共に祀られている。境内には新渡戸記念館があり、開拓に関する資料と伝来の武器、兵法資料と稲造博士の遺品、直筆の書などが展示されている。

そういう意味では、十和田という町は実に大きいことをなした記念すべき町だ。日本中からもって注目を浴びなければいけない町だ、と思いました。

DNA的な記憶で、人は移動するのではない

最近、世の中が段々情報化社会になっていくと、人間はいちいち自分の考え方で行動しなくなるんじゃないか、と思うんです。人は無意識の状態できいていくんじゃないかなと。

そうすると、DNAレベルといいますが、自分が今ここにいるっていうのは、何か理由があるのではないかと、いうことを踏まえて行動するんじゃないか。

もともと青森県っていうところは、はじめから人がいたところじゃないんですね。江戸の末期なんてのはさほど誰もいなかった。私も日本海側の小泊村というところの生まれですけども、「村史百年」という本を読んだら面白くてやめられなくなっちゃったんですね。

当時、大阪と京都から七〇人ぐらいのキリシタンが流されて来ているんです。その頃、人間が平等であるという考え方が、お上や国家に対しては恐ろしかった。それで流されてきたりしているわけですね。

このように青森県っていうのは様々な理由で、我々の先祖がここに来て、我々は今ここにいるんじゃないか、と思うんですよ。

一人の男がやってきて、十和田撮影所を企てた

私の師匠でもある寺山修司さんは、歌人であり、劇作家、非常に多才な人でした。この寺山さんのお爺ちゃんにあたる人が、十和田に来ているんですね。寺山修司は元々開拓民の子です。その爺ちゃんが、鹿兒



新渡戸傳 (1793-1871)
写真左。右は従者。
の川が低地を流れていることだった。一番差のある所では奥入瀬川より三〇mも高い。

太平洋の橋、その礎となる
十和田三本木稲生川の歴史

いつの時代かわからないが、作助という百姓が盛岡から鞆木ついで来て切り拓いたという伝説がある。ところは現在の十和田市の元町あたり。古くはこの北側に根元から三本木にわかれた「百たも」の大きな木があった。人はこれを三本木と呼び、後に土地の名として長く根付いた。

三本木は十和田湖の噴火で形成された火山灰土壌の扇状地帯で、荒蕪たる平原だった。馬の放牧地帯で人の居住にあまり適さなかった。樹木が生えにくく、暑く夏は日に晒され、太平洋から冷たい「やませ」が吹き冷害を起こした。冬は西北からの「八甲田おろし」が吹雪となり、多くの凍死者を出した。

旧三本木、現在の十和田市は青森県内有数の米どころで農業を基盤として発展し現在人口約六万六千人と県内第四位の都市だが、その生命線は「稲生川」だ。市の中心地稲生町とともに、暮末におこなわれた三本木原開拓により造られた人工河川である。

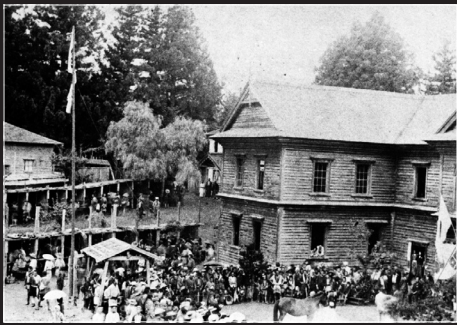
その開拓を指揮したのが、南部盛岡藩士・新渡戸傳である。

当時南部盛岡藩は三本木を含め広大な地域を有した。しかし度重なる凶作や、蝦夷地警備等のため財政が逼迫し、農民の生活は悲惨なものだった。藩の建て直しのため新田開発は重要な課題だった。そして遂に安政元(一八四四)年「十ヶ年土の制」を施行した。

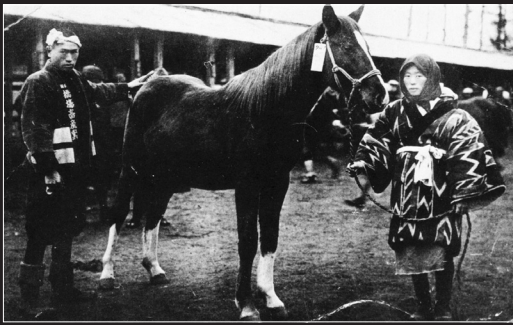
これは、格下の武士から身分と家禄をとりあげ、十年の猶予期間内に新田開発で成功した者や学問や武芸で認められた者だけを、再び藩に召し抱えるという制度だった。十ヶ年土の対象となった者たちはなんと開拓に成功しようとして、当時既に幾度も事業を成功させ「開拓のエキスパート」と目された新渡戸傳のもとに集まった。

傳はそれらの人々や同じ志の商人たちと協力し、若き商人時代から構想していた三本木原の大規模開拓計画を実行に移す決意をし、安政二(一八五五)年四月、開拓願いを藩に提出、八月に許可され三本木新田御用掛となり工事に着手した。実に傳六二歳であった。

広い三本木原に田畑が少くない一番の原因は、周辺の川が低地を流れていることだった。一番差のある所では奥入瀬川より三〇mも高い。



文久3年(1863)、開祖新渡戸傳によって開かれた馬市は、その後も好評を博して継続された。明治17年6月三本木産馬組合が設置され、同年12月三本木馬車馬飼育所設置が決定するや馬産熱はとみに高まり、同31年には早くも全国一の馬産地として実績をあげるにいたった。この写真は時代も場所も明らかではないが、屋外市場であることは確かである。



手塩にかけて育てた馬と別れを惜しむ若夫婦である。好物の豆やにんじんをたっぷり与え、鼻をさすり肩をたたいて新たな幸せを祈りながら、別れ難い別れをするのである。(以上、出所原文ママ) せり市の一つの風景である。愛馬に手をかけしっかりと立つ男性の、誇りと悲しみが混在する強い視線が愛おしい。絡入半纏の女性の背中に隠れているのは、生まれたての乳飲み子らしい。



約150年前の三本木開拓により切開された人工河川「稻生川」。現在では太平洋まで続く総延長70kmとなり、田畑に命の水を運ぶ。



開祖新渡戸傳の長男十次郎の近代都市計画が反映される美しい碁盤目状の町並み。

※左上・中央写真出所、文・引用 「写真集・明治・大正・昭和 十和田」(工藤祐篤、昭和55年国書刊行会刊)より

※写真提供: 十和田市立新渡戸記念館

知性を越えた知恵を持つ 無名の人こそ一流の英雄だ

島武の武道、示現流の先生だつたんです。八戸の一番最後の殿様が鳥津の人です。おそろくそういう縁で来たのかもしれない。それで寺山修司の爺ちゃんが、十和田に何しに来たかというところ、ここに撮影所を作ろうと思つてきたらしいですね。まあ、そういう山師だつたんじゃないかと思つてます。しかし、実現したら面白いではないですか。まあ、そういう可能性もあるんじゃないでしょうか。十和田撮影所なんてね。

私が一番好きな言葉に「釈迦も、キリストも、モハメドも、三流の英雄たちだ。流の人

寺山修司氏は文学の人ですが、寺山一族は鹿兒島から渡ってきた武道家の家系だと思われまふ。家紋も鳥津系の家紋です。青森県という津軽弁で有名な歌謡の淡谷のり子さんが代表だといわれまふが、あの方も四国は阿波の国がルーツでした。

世界の中のサルが五〇日間のうちに「一斉に葉っぱを丸めた道具にして水を飲んだとい

最近はやたら「知」知性「知の文化」だといいますが、ああいうことは私は大したことないと思つてます。うちの爺さんは字も書けない無字の人でしたけど、漁師でした。私よりたくさん海のこと、人間が生きることを知つてたと思つてます。



十和田市の、未来を見つづける傳翁像 三本木原への上水に成功した安政6(1859)年5月4日を記念して、毎年5月4日に太素塚において十和田市挙げて「太素祭」(太素は傳の号)が盛大に行なわれている。



新渡戸稲造(1862-1933) 名著「武士道」Bushido: The Soul of Japan(1900年)は時代を超えて読みつづられている。

※写真提供: 十和田市立新渡戸記念館 http://www.towada.or.jp/nitobe/ 「新渡戸記念館」で検索

青森県は多様な人の集まり、大いに違つていいと思う

十和田あたりが青森県の臍みたいなことと、何かははじると、とても面白いことができます。何かにあつて、とても面白いことができます。何かにあつて、とても面白いことができます。

三上寛 フォークロックアーティスト、俳優、詩人。一九五〇年、青森県旧小泊村生れ。五所川原高校卒業、警察学校中退後、上京。

この子どもは後に改名し、国際連盟の事務次長として国際親善に尽力し、日米間の融和に大きな足跡を残した。太平洋の橋」として著名な農学博士、法

十和田市現代美術館

「フラワー・ホース」 (作 チェ・ジョンファ/韓国) 十和田市中心にある官庁街通り、別名「駒街道」と呼ばれる大通りに面して十和田市現代美術館がある。「馬の町」としての記憶が、現代アートとして甦る。寺山修司が生誕馬を愛したのは、遥か前に十和田を訪れた祖父のDNAなのか。興味は尽きない。

二〇一〇年七月六日、夕刻七時。満を持して三上寛がステージに立ち演奏を始める。エレキギターの唸りとともに叫び、吼える。夕闇が震える。

十次郎は傳の開拓の構想をさらに拡張し、区画整理を中心とした近代を先駆ける雄大な都市計画までを考えた。これは、十次郎、傳亡き後、長く実現されなかったが、戦後、街割りと道路計画をほぼそのまま踏襲する形で十和田市中心街が整備され現在に至る。

十和田市現代美術館

十和田市現代美術館

十和田市現代美術館

傳の計画は、奥入瀬川の上流に遡り、水の取り入れ口を設け、途中穴堰(トンネル)を通して水路をつくり、広い台地上で大規模に開拓を行うことだった。